永安雅乃

月と梅

大正拾四年四月十五日印刷
大正拾四年四月廿日發行

定價一圓五拾錢
（送料八錢）

層雲第五句集
泉を掘る

著者　荻原井泉水

發行者　東京市神田區小川町四一
小西榮三郎

印刷者　東京市外下戸塚二四〇
內田廣藏

發行所　東京市神田區小川町四一
振替東京四〇〇番
合資會社　小西書店

序に代へて

俳句と私

憶へば私と俳句とは三十年にも近く長い因縁である。私は俳句といふ此の微小なものに、自分の生涯をすつかりさゝげて來たやうなものだつた。いや、俳句にひかれ、俳句に溺れて來たのだと、さう云つた方が正しいかも知れない。私が俳句に指を染めたのは、中學の一年生の頃からである、俳句の爲めに學業をおろそかにして落第した事もある、大學では他に專門のものを修め、其頃京留學の內意をも洩らされたのだが、私は其を斷つて、其頃喧し動にたづさはり俳壇の革命を叫んでゐた。其爲めに自分から小、其雜誌を維持する爲には、經濟的に苦しみ、又、肉親の者の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

希望にも背いて、つまり其雜誌の『我』を通す爲に、家庭を犧牲にして顧みなかつたのである。然し、其は皆私一人が惡かつたのだといふ事を、今私が家庭を失つて全くの獨になつた時、しみ〴〵と思ひあたるのである。

あれ程に、自分の心身を打込んだ俳句ではあるが、今の私は其俳句にも執着がない程、もつと高い或宗教的な念求にまで私の心は燃えてゐる。其爲に、私が京都に來て僧院生活をしてゐるので、或人から其ならば君はもう俳句をやめたのか、と問はれた。其れに對して私は答へる。――大きな道を求める爲に俳句が邪魔になるならば、私は俳句を棄てる事に躊躇しまい、けれども邪魔になるものは蓋し『作らうとする心』であらう。私は今、俳句を作らうとはしない、其れと共に『作るまいと云ふ決心』をも構へない。その何れの心も共に『わたくし』である。私はたゞ自然に、池の水のやうな心を持ちたい、そこに映るものが俳句になれば俳句が出來よう、出來なければ出來ないでもよろしいのである。

或は又、私が京都に來た事を、關西地方の俳壇に自分の俳風を扶植する爲めであるかと推する聲をも聞いた。これは甚だしい見當違ひな臆測である。今の私には、所謂『俳壇』などは全く眼中にない、私があれほどにも精魂を傾けて提唱した處の新しい俳句ですら、敢て是を人にすゝめようとはしない。舊い俳句で滿足してゐる方は其でよろしい、若し其人の心がもつと苦惱を知るようになり、又自ら機緣が熟してくれば、しぜんにその迷妄から目醒めるであらう、靜かに眠つてゐる人の耳元で、太鼓を打鳴らすやうな事を今の私はしたくないのである。

私は今、俳句を作らうとしないと云つた。然し、私の心持では、是から大に俳句が出來さうに思はれる。此心持から俳句が產まれなければウソだと云ふ氣もする。寧ろ、今まで作つた句は皆駄目で、本當の私の句は此後にあるといふ氣もする、さて、果して發表する程のものが出來たらば世間にも見て貰はう。

若し私の句が諷誦に値するものであるならば、其は決して私の手柄ではない、其は蓋し極めて自然にして成つたが故に整つたものになつたのであらう。功は『自然』にある、『私』ではない。或は若し、其句が拙悪で蕪雑なものであるならば、其こそ自分が悪いのである。罪は『自然』にない、『私』にある、何故といふに、其が拙くして純でないといふ事は、私の魂が澄まず、自然さながらの所に打入ることを得ずして、『わたくし』の趣味技巧に遊んでゐることを暴露してゐるものだからである。

×

私は今にして思ふと、自分に得た所は何一つないといふ氣がする、自分が多年苦心してこゝまで築いて來たと思ふ俳句ですらも今は又、第一歩から出發しなければならぬやうな氣がする。それならば、他の人の作句を選することなどは出來ないかといふに、其は句を見れば、佳いとか悪いとか、ピタリと解る、

といふ氣がする。これは私が判ずるのではない、私の心に映るものが自然にさう現はれるのであるらしい、丁度、鏡に物が映るやうに――。それでもよい。いや、其が本當かもしらぬ。私は、自分が多年修練して來たと思ふ選評の標準などを捨てゝ、たゞ此の心の鏡だけを磨かう、と思ふ。

青木此君樓

明星消ゆ其時巨人歩みきたる
斧の音青空にひたとひびけり
木のいのち絶たんとする者が瀧なす汗
山の奥遥かに夕日澄める山
怪我人に代りて機械にかかる頃うて
手を放てば愴惶として此日ゆくなり

〔一〇一四〕

樵夫ら兎をたべて寢るばかり

桑摘みて來桑摘みて來此家はせはし

すすけた家にて安らかに佛となりし人

見も知らぬいつくしき魚旅なれば見し

蟲一づにすだき山路夕かげり

風さむう出て曇れる海の舟に在り

蕎麥の莖赤く晴れて山の一枚畠

どんぞこの淋しさ赤熱の火を見つめる

山の寒さの夕べに迫る宿をとる

〔一一一〕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凍る寒さは山の荒い湯にひたり
夜夜の寒さを疎ましき月ありて照り
かうべをあぐるあなうるはしの夕空はあり
山の池に夕闇迫らんとするや光り
ただ見るまんまんと潮滿ちきはみ
一言言葉殘して深夜旅立つ
ありありと春見えて工場に働く
青空の下車座となつて酒酌む
雨充分に吸つた畑にて空明るうなる

鶺鴒の胸の白さと春の白雲と
日の偉いさを思ふにつけ砂握りたり
戯れん兒はあらず多く机による
潮高く菜の花の影にさしくる
水音にまぎれて居らずなりける小鳥
櫻の葉晴きより夥しき實を落とす
青い水にひたりし炎天の葦
峰秀でたり月明涼しければ
綠の森こんもりと梅雨あがりたるか

梅雨殘りなくて汽船海をすべりゆく

月明ければ仕合せといふ野邊の送り

夕風まつはる黍の穗をぬけるあり

天日の下水爭ひて血みどろ

木槿咲く垣根道を山へとる

目よりも高く水りゆんりゆんと流れくる

霜下りそめてぬく葱の白根が深い

山小屋のそこらの山に夕日は滿てり

雪の下からのぞいてゐる菜つ葉で月夜

〔二二一〕

七戸默徒

すさまじく枯れし山に日あたりひもじき
我教へし唱歌歌ひつれて夕暮はよし
人の子愛せんとする我がつかれ居る
心空しく白墨つまみ書くことをする
一日しあはせなりし子をいだきやる
夫婦勤めに出づるあつき茶をすすり

〔一〇一四〕

汽車が通るだけの夕暮にてとざせり
はらから父を爭へば二人抱きて歩むぞや
父に似しかたくなを叱られ寢る子よ
海女が水飲みに來て泉にうつるすがた
母馬うたれつれだちて仔馬勇めり
花らんまん遠き夜の波ひるがへる
船をあがれば櫻あたたかく埃せり
種まきすめばむつちりしてもどる
我が怒にたへて妻はひたと子を抱き

女に剃らするのをぶえたのしく
はげしき働を終れば日は落ちてゐたり
百姓の子たくましく地より冬となる
心の暗さあられこぼれ來て地に敷けり
すつかり許して子を歸へし己も歸る
父が懷に乳ぶさ探り眠たくいとけなき
子をおひてあせかきちちのさびしさ
父にだかれてゆまりしつ月を見てゐる子
やまのからすなきひとりゐてさけくむ

（一一一）

（一二一三）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com